時事新報

一番地 報社

東京　明治十七年十一月十五日　土曜日　第八百四十四號　日曜日休刊　定價金三錢

賞勲敘任

○明治十七年十一月十三日

敘勲三等賜旭日中綬章　元老院議官從四位勳四等　宮本小一
仝　仝　仝　仝　田邊太一
仝　内務省三等出仕正五位勳四等　長與專齋
仝　元老院議官從四位勳四等　西村貞陽
仝　兵庫縣令正五位勳四等　森岡昌純
仝　警視總監仝　仝　大迫貞清
仝　參事院議官正五位　尾崎三郎
敘勲四等賜旭日小綬章　參事院員外議官補步兵少佐從六位勳五等　馬場素彥
仝　理事步兵大尉從六位勳五等　井上義行
敘勲四等贈與旭日小綬章　海軍省雇英吉利國退職海兵隊中尉　アルベルト、ジヨルヂ、シドニー、ホウス
敘勲五等賜雙光旭日章　二等警視兼内務少書記官步兵中尉從六位勳六等　小野田元熙
仝　海軍少書記官從六位勳六等　原田啓
仝　二等警視步兵中尉從六位勳六等　林誠一

○明治十七年十一月十三日
任理事　參事步兵少佐正六位勳四等　多田正英

時事新報

社告

時事新報豫約購讀者諸君へ申上候

○時事新報豫約購讀御注文被成下候節は（東京横濱兩市中御住居れ御方を除き）同時に代金御送致被成下候樣奉願候右金員當方に到着仕候節其旨郵書を以て別に御通知は不申上其代りに毎日御郵送申上候時事新報の帶封表面御名前の脇に（何月何日）と記入仕置候間此日附は即ち御拂込みの前金相切れ可申期日にして此期日までの時事新報代價幷に郵便税とも御拂濟相成候事と御承知被成下度候

○時事新報豫約購讀れ諸君にて住所御移轉等のため新報配達先き御取替へ被成度節は新舊兩方の所書を併せて御通知被成下度候

○郵便爲換又は銀行爲換等を以て時事新報代價御拂入れ被成下候節當方の宛名は（時事新報社）と致し郵便爲換なれば（東京郵便本局）にて受取るべき樣御取組被成下度候

○御住所の御都合等にて郵便爲換又は銀行爲換等御取組被成候儀御不便の御方に限り時事新報代價幷に郵便税共一錢又は二錢の郵便切手にて御拂入れ被成下候て苦しからず候

○時事新報郵便税之是迄一箇月分廿五錢一箇年分三圓の割を以て申請來り候處此度大祭日幷に年始歲暮等の休刊を相除し刊行日數一箇年に都合十四日丈け増加仕候に付以來郵便税は一箇月分廿六錢一箇年分三圓十二錢の割を以て前金にて申請ることに相改め候

善ク勉メテ善ク樂シムハ開明ノ事ナリ

早起ハ人生第一ノ保身法ニシテ毎朝早ク起キ空氣ノ恰モ沈澱シテ清淨ナルモノヲ呼吸スル其利益少ナカラズ夜モ亦同樣ニシテ如何ナル事故アルモ就寐ノ時ヲ十二時ヨリ過ゴス可ラズ十二時後ニ一時間ノ眠ヲ忍ブハ攝生ノ裁判ニ於テ其罪十二時前三時間ノ不眠ニ等シトハ我輩ガ常ニ學醫ノ言ニ聞ク所ナリ如何ニモ道理至極ノ言ナレ𪜈唯吾人智識ノ不完全ナル之ヲ守ル能ハズシテ往々醫教ニ背クヿ多シ慚愧ニ堪ヘザル次第ナリ

又醫ノ言ニ云ク早起早臥ハ攝生ノ要タルヿ固ヨリ辨ヲ俟タズト雖𪜈今一歩ヲ退ケ起臥共ニ早クスル能ハザレバ姑ク之ヲ其マヽニ任ジテ咎メザレ𪜈爰ニ一ツノ心掛ケハ毎朝覺レバ則チ起キ毎夜臥スレバ則チ眠ルノ秘訣ナリ蓋シ世上ノ人ヲ視ルニ朝既ニ目ハ覺レ𪜈尚眠ヲ貪リ夏ハ暑ニ堪ヘズトテ蚊帳ノ中ニ煩悶シ多ハ衣服ヲ着替ルニ寒キヲ怖レテ蒲團ニ戀々シ甚シキハ枕邊手ヲ伸ハシテ烟管ヲ探リ喫烟二三服尚ホ奮起スルヲ得ザル者アリ夜ハ物思ヒツヽ寢ニ就キ今朝以來ノ事柄ヲ案シ出シテ其喜怒哀樂ヲ繰返シ尚足ラザレバ數年ノ昔ニ溯リテ往事ヲ計ヘ苦樂百出精神爲ニ疲レテ眠ヲ催シ翌朝コレヲ思ヘバ都テ痕ナキガ如キ者アリ凡ソ此朝夜ノ時間ハ不眠不醒ノ時ニシテ人事ニ益ナキノミナラズ其甚シキハ攝生上ニ於テ身体ヲ害スルヿ却テ不早起不早臥ノ害ヨリモ大ナルモノアリ故ニ苟モ身ヲ重ンズル者ハ朝起夜臥ノ早晩ヲ問ハズ唯目ノ覺ル時又寐ニ入ルノ時ヲ相圖ニシテ唯一氣ニ起ルヿヲ勉メ又眠ルヿノ習慣ヲ養フ可シト云フ

右ハ人ノ身体ニ關スル醫事談ニシテ我輩ノ最モ服膺スル所ナルガ我輩ハ此醫事談ヲ擴メテ今日ノ人事ニ及ボシ大ニ心得トモ爲ル可キモノヲ見出シタリト申スハ兼テ鄙見ヲ以テ竊ニ我日本ノ人ト外國ノ人トヲ比較スルニ其智愚徳不徳ハ相違スル所ナキガ如クナレ𪜈日常ノ習慣ニ外國人ハ善ク勉メテ又善ク樂シム者ト評セザルヲ得ズ毎日各自ノ業ニ就クニモ必ズ時ヲ違ヘズ、時至レバ勉メ、時去レバ休ム、就業中言語少ナク又決シテ喫烟セズ孜々勉強シテ業ヲ終レバ則チ自由自在ニ遊樂シテ其快活ナルヿ先刻ノ苦業ハ恰モ之ヲ忘レタル者ノ如シ毎夕ノ散歩毎日曜日ノ休暇其日中又前日ノ有樣ニ比較スルトキハ苦樂ノ表裏コレヲ別世界ト云フモ可ナリ抑モ人身生理ノ定則ニ於テ人ノ心身ハ鐵石ニ異ニシテ漫ニ勞役ス可キモノニ非ズ其約束ノ堅キハ他ノ物理ニ等シクシテ毫モ欺ク可ラズ或ル西人ノ説ニ日曜日ノ休息ハ宗教外ヨリ觀ルモ適宜ナルモノニシテ馬ヲ飼フニ毎日役スルモノト一週間ニ一日ヲ憩ハシムルモノトヲ比較スルニ憩フモノハ壽命長クシテ其働モ亦平均シテ大ナリ人ト馬ト肉体ノ生理ハ同一ナルガ故ニ日曜ノ休息ハ宗教ノ由來云々ニ拘ハラズ人事ニ必要ナリト云フモノアリ此説ノ當否ハ姑ク閣キ人生ノ勞役ニ休息ヲ要スルハ自然ノ數理ニシテ我日本人ト雖𪜈理外ノ生物ニ非ザレバ事實ニ於テハ必ズ休息スルモノナリト雖𪜈其休息ノ法甚ダ不規則ナルガ如シ先ヅ今日ノ事相ニ現ハレタル所ヲ云ヘバ時刻ノ約束嚴重ナラズシテ宴席集會等ノ不都合ハ無論毎日職業ニ就ク輩ニテ就業ノ時ヲ誤ルモ必ズシモ嚴責ヲ受ケズ左ル代リニハ業ヲ終リタル其後トテモ本人ガ必ズシモ休息快樂ヲ急クニ非ズ就業中ト雖𪜈喫烟禁セズ言語喧シク或ハ日中幾度ノ休息ニ談笑遊戲傍ヨリ之ヲ見レバ苦役中ノ人ト思ハレザルモノアリ日曜ノ休暇ハ先ヅ日高ケテ尚眠ルヲ以テ第一ノ要ト爲シ漸ク起キテ朝飯ヲ喫シ未ダ終ラズシテ約セザルノ友人來リ訪フ者アリ、煎茶喫烟時候ノ不順ヲ訴ヘ身体ノ健康ヲ祝シ文事ヲ談シ世態ニ及ボシ私事ノ如ク公務ノ如ク閑話ノ如ク用談ノ如ク尚甚シキハ數名ノ友客一席ニ落合ヒ客ト客ト相語リテ主人ハ恰モ傍聽人タルノ奇談ナキニ非ズ斯ル次第ニテ午時ヲ過ギ日暮ニ至リ顧テ日中ノ事ヲ回想スレバ日曜ノ休暇敢テ休セザルニ非ズ終日職業ヲ執ラズ要事ヲ成サヾリシガ故ニ休ハ則チ休ナレ𪜈去リトテ是レゾト云フ可キ快樂ヲ得タルニ非ザレバ亦休日ナラザルガ如シ偶マ其日ノ來客ガ兼テ主人ノ待設ケタル朋友ニシテ恰モ同氣相投スルノ快樂事ヲ企テヽ一日ヲ消スレバ格別ナレ𪜈若シモ然ラズシテ俗ニ所謂御附合ヲ以テ時ヲ費スガ如キ樣ニテハ其時間ハ憩フガ如ク憩ハザルガ如ク主客双方ノ爲ニ何等ノ益スル所モナクシテ唯空シク時ヲ費シタリト云フヨリ外アル可ラズ其趣ハ彼ノ學醫ノ言ニ朝目醒メテ起キズ夜寢ニ就テ眠ラズ、眠ルガ如ク醒ルガ如ク不眠不醒ノ間ニ彷徨因循スルモノニ異ナラズ此類ノ事ハ世間ノ日常ニ往々見ル所ニシテ或ハ清明ノ春風ニ午睡シテ花ヲ觀ルヲ忘レ、秋ノ夜ノ假寐ニ明月ニ背キ、冬ノ朝ノ初雪ニ火燵（コタツ）ヲ友トスル等安息ハ則チ安息ナラント雖𪜈之ヲ許スニ快樂ノ名ヲ以テス可ラズ畢竟スルニ我日本國人ノ習慣ハ尚未ダ善ク勉メ善ク樂ムモノト云フ可ラザルガ如シ故ニ眞實ニ我輩ノ所望ヲ云ヘバ只管時間ヲ重ンジテ一年三百六十五日中ノ一刻モ生涯苦樂ノ一部分ト思ヒ勞苦スルニモ非ザレバ則チ樂シムト其分界ヲ明ニシテ苦ニモ樂ニモ徒ニ時ヲ空ウスル勿ランヿヲスルノ一事ナリ

此論緒ニ就テモ序デナガラ云フ可キハ我時事新報發兌ノ事ナリ今後其休刊ヲ毎日曜日ニ限リテ歲末歲首其他ノ祝日等ヲ問ハズ一切平日ノ如ク發兌スルヿニ定メタルハ一年凡ソ半月ノ勞ヲ増シタルモノニシテ今ノ發兌ガ十二箇月ノ事業ナレバ之ニ半ヲ加ヘテ十二箇月半ノ事ヲ執ルガ故ニ甚ダ大儀ナルニ似タレ𪜈唯我輩ノ志願ハ日本ノ一事一物モ開明ノ方ニ進歩セシメ苟モ西洋諸國ニ取テ倣フ可キモノアレバ怠ルヿナカラントスルノ一偏ニシテ嗚呼ガマシクモ彼ノ國人ノ善ク勉メ善ク樂シムノ風ヲ慕ヒ假令ヒ一年ニ半月ノ勞ヲ増スモ一方ニ刻苦シテ一方ニ快樂ヲ遇ウスルノ法モアランヿヲ偏ニ社員ノ心掛ケ次第ニテ苦樂必ズ相償フヿモアランナレ𪜈開明熱心ノ熱餘以テ此擧ニ及ビタルヿナリ或ハ漸次ニ習慣ヲ成シ日曜日ノ休暇ヲモ廢止シテ差支ナキノ場合ニモ至ランカ則チ速ニ之ヲ廢ス可シト雖𪜈目下一氣ニ之ヲ決斷スルノ勇ナキハ唯慚愧ニ堪ヘザルノミ

佛清事件

○東京の近狀　東京よりの最近報に據るにブリール、ド、リスル將軍は遠からず援兵を受け取る筈にて目下之を俟ち居れり又支那兵中にも疾病を以て打臥すものあり或は窃かに逃走するものあり雲南より進行したる兵隊中には斯かる場合特に多ければ支那兵は止むを得ず北方に向けて引き上げんとする最中なり又一報に據るに支那兵は陸河岸に於て曩きに佛軍に敗られてより高岡險要の地に退き復た來襲を試むるとなく其軍中にも食物乏しく疫癘流行して死亡多く逃亡するものも亦少なからず聞く所に據るに支那兵れ一隊はサインギエンに向けて進行せしが是れも佛軍に遮られ數多の兵卒を失ふて同しく北方に引き退き其際風聲鶴唳に驚きて爭ふて相逸走し十月三十一日支那軍に殿しゐる一隊は佛軍に殺されたるもれ多しと云ふ

○英國の支那商賣　英國と歐洲諸國中支那と貿易の關係最も廣き國なるとは世人の知る處なるが其一例と云べきは昨千八百八十三年中外國より支那の諸港に入港したる船舶中佛船の數は七十五艘に過ぎざれ共英船は千七百卅六艘なり又支那の諸港より諸港へ入港したる船舶（例へば廣東福州より上海天津へ入港し上海天津より廣東福州へ入港したる類）は英船五千三百六十六艘にして佛船は僅に十三艘のみなりと云ふされば佛清戰爭れ爲めに佛國が被むる處の損害は甚だ少くして英損害れ多分れ英國の荷擔に歸するとあらん英國が早く佛清の爭を止めんと欲するも尤なり

○軍費獻納　先頃の紙上に滿州旗族等より軍費として若干の金を清廷へ獻納したる由を掲げしが今又聞く所に據れば恭親王より銀百萬兩前協辦大學士李鴻藻より三十萬兩前大學士寶鋆より五十萬兩と何れも獻納して軍費を助くる由又北京の諸大臣も同上れ目的にて一千萬兩許りの醵金をおし
なりと云ふ

○陳湜　當時呉…
統陳湜れ同治年間…
れしゐる人にく…
元來同氏は自ら…
人手を假らざる…
南洋事宜陳寶琛…
あるべしとの噂…

○佛國大尉死去…
退却けられたる…
縊に扶け上られ…
模樣もありしが…
を以て送葬を營…

○デトリング氏…
日耳曼人デトリ…
く一旦國に歸り…
補せられ同地に…
に天津ゐ呼寄せ…
る後れ常に同地…
任せさりしが近…
たりと云ふ

雜

○撿閲式行幸…
日午前九時三十…
谷練兵塲へ行幸…
川、伏見の兩宮…
着輦の際小松宮…
川三撿閲使れ西…
憩遊ばされ夫よ…
揮官三撿閲使の…
再び玉座に復ら…
で諸隊と小隊縦…
あらせ給ひしは…

○鴨狩天覽　聖…
いされ鴨狩を天…

○英獨新聞の評…
聞れ日本の新聞…
るものある由を…
を現れしたる次…
府及ひ人民が寒…
耶蘇新教を採用…
發の偏數べル…
八月十一日に教…
するとを止めて…
たるに國中重立…
日本の重立たる…
察して耶蘇教を…
上お掲載したり…
蘇教の信徒を死…
と盡したるとお…
聰へ…
々を講述しおり…